

## 音楽科における異年齢集団学習の試み(2)

菅 裕<sup>\*1</sup>・藤本いく代<sup>\*2</sup>・阪本幹子<sup>\*2</sup>・竹井成美<sup>\*2</sup>  
稲野さやか<sup>\*3</sup>・石川優子<sup>\*1</sup>・栗野聖子<sup>\*4</sup>・山下さちか<sup>\*5</sup>

### A Difference Age Group Learning in Music Class (2)

Hiroshi SUGA, Ikuyo FUJIMOTO, Mikiko SAKAMOTO, Shigemi TAKEI  
Sayaka INENO, Yuko ISHIKAWA, Seiko KURINO, Sachika YAMASHITA

#### 要旨

6年前から取り組んでいる中学校第3学年音楽選択クラスと小学校5年生との合唱の合同学習の試みについて、今年度は、中学生が合同学習を通じてどのような思考を展開しているのか焦点を当て、生徒の合同学習中の発言や授業後の反省記述をもとに分析を行った。その結果、1. 中学生の小学生に対する全体的な指導方針は、「適切な身体のコントロールによって大きな声やきれいな声をつくること」に限定されており、その指導や言語化の方法は自分たちが中学校の授業の中で受けた指導の模倣であること、2. 効果的にわかりやすく教えるための教育技術について豊かな反省的思考を展開している半面、音楽そのものについての反省的思考は不十分であることが明らかとなった。

#### 1 はじめに

宮崎大学附属中学校と宮崎大学附属小学校では、6年前から中学校第3学年音楽選択クラスと小学校5年生との合唱の合同学習を実施している。この合同学習では、中学生が学習集団のリーダーやモデルとなり、小学生に対して合唱指導を行う活動が展開されている。

昨年度の研究では、合同学習を通じて、小学生の声の響き、テンポ感、強弱表現に顕著な向上が確認できた。しかしその反面、年少の子どもとの関わりによる社会的スキルの向上以外の面で、中学生が合同学習を通じて何を学習したのかという点についての評価が不十分であることが課題として残った(菅ほか 2009)。

\*1 宮崎大学大学院教育学研究科

\*2 宮崎大学教育文化学部

\*3 宮崎大学教育文化学部附属中学校

\*4 宮崎大学教育文化学部附属小学校

\*5 宮崎大学教育文化学部附属幼稚園

合同学習が「ミニ教育実習」を通じた社会的スキルの学習にとどまっているのであれば、音楽科の授業の成果としては不十分である。「教える」行為を通じた、なんらかの音楽的な高まりを中学生の側にも保証できていなければならない。

同様の点について管田(2008)は、米国と日本の異年齢保育の比較を通して、仲間に教えることを通じた年長の子どもの自尊心や知性の発達が関心の対象になっている米国に対し、わが国では、保育者が「お世話する—お世話される」といった固定的な役割関係を期待しすぎるために、年長の子どもの負担が大きくなりがちであること、そのため社会性の発達以外の面での異年齢保育の教育的意義について検討する必要があることを指摘している。

そこで今年度は、合同学習における中学生の学びのプロセスに焦点をあて、小学生への合唱指導を通じて中学生がどのような思考を展開し、その結果どのような知識や技能を発見したり獲得したりしているのかについて考察する。

## 2 研究の方法

### 2.1 合同学習の実施

今年度の合同学習は、平成20年5月に実施された。活動過程は以下のとおりである。

- (1) 全体でのオリエンテーション
- (2) 小学生・中学生混合グループに分かれ自己紹介
- (3) 小学生全員による「エーデルワイス」の歌唱
- (4) 中学生によるグループごとの歌唱指導
- (5) 再び小学生全員による「エーデルワイス」の指導
- (6) 全体でのまとめ

### 2.2 分析の対象

分析の対象としたのは次の3種類の資料である

- (1) 合同学習における中学生による小学生指導場面での発言
- (2) 合同学習終了後に中学生が記述した個々の小学生へのアドバイス
- (3) 合同学習終了後に中学生が記述した小学生指導の感想・反省

### 2.3 分析の方法

上記3種の資料中の生徒の発言及び記述を1項目ごとにコーディングし、各コードの発現頻度やコード相互の内容の質的関連の特徴を抽出した。

## 3 結果

### 3.1 コーディング

中学生の発言・記述内容のコーディング結果を表1に示す。なお括弧内の数字はコーディングされた発言・記述の出現度数である。

表1：コーディング結果

指導の内容	身体のコントロール	歌うときの姿勢 (59) 口を大きくあける (52) 目線を上に (26) 歌うときの表情 (18) お腹から声を出す (14) 呼吸法 (9)
	声量や声質	声量を大きく (23) 高い声や低い声の出し方 (14) きれいな声 (11) 響きのある声 (3)
	正確に歌うこと	正確な音程 (7) 楽譜をよく読む (2)
	歌う態度 (12)	
	音楽的表現 (9)	
効果的な教え方	わかりやすく教える	言葉の選び方 (11) 手本を示すこと (9) わかりやすい説明 (7) 具体的な説明 (2)
	時間配分の工夫 (7)	
	コミュニケーションの取り方 (5)	
	教える態度 (4)	
小学生の印象	素直 (26)	
	積極的な子とそうでない子の差 (3)	
	理解が速い (3)	

全体は大きく「指導の内容に関すること」「効果的な教え方に関すること」「小学生の印象に関すること」の3つに分かれた。指導の内容では、歌うときの姿勢や口の開け方など身体のコントロールに関わるものが非常に多かった。効果的な教え方については、小学生にわかりやすく教えるための言葉の選び方についての記述が目立った。

### 3.2 指導場面における中学生の発言

中学生の小学生に対する指導は、「歌うときの姿勢」と「口を大きくあける」の2点を中心となっていた。姿勢の指導の場面で頻繁に行われていたのが、小学生の後頭部・肩甲骨・おしり・かかとの4点を壁に密着させるというものである。

## 事例1

(1人の女子中学生が男子小学生5名の指導を担当している)

中学生「まず姿勢が大切っていうのはわかるよね。立つ姿勢ちょっとやってみてくれる」

(1人ひとりの児童の姿勢を確認する)

「足は肩幅。肩甲骨、骨があるんだけどここに(1人の児童を前に連れ出し、背中を触って示しながら)、その骨と後頭部とおしりかかどが壁に立ったときにきれいに一直線になるように」

(小学生を壁のそばに連れていき、1人の児童の身体を壁に押しつけて姿勢を確認させる)

「この姿勢で歌うとけっこうきついよ。ちゃんときれいな姿勢で歌うと。あともう1つ、きれいな姿勢になるのを確かめるためには、手の指がズボンの縫い目に沿うように横に」

(子どもを1人ずつ壁に背中を押しつけて立たせ、姿勢を矯正していく)

「口を大きくあける」ことを指導する際には、指の本数で口のあける大きさを示す方法が取られていた。

## 事例2

(1人の女子中学生が女子小学生6名の指導を担当している。児童を壁に背中を向けて立たせながら)

中学生「かかどと背中とここ(後頭部にふれる)をつけて、ちょっと目線をあげて歌うとい  
いよ。口をあけるときに、“ア”は指3本で、“イ”は歯が閉じないように指1本分。」

(自分の口で示しながら)

「“エ”は2本。歌っている時に気をつけるのは難しいかもしれないけど、“ア”ってのはしているときに3本分あけて歌って。“ラ”ってした顔してみて。」

(鏡で1人ひとりに自分の口を見せながら)

「自分の口のあけ方を見て」

(指を3本自分の口に入れさせる)

「歌うとき姿勢」と「口を大きくあける」ことについての指導は、全てのグループで行われており、壁に背中をつけさせたり、指を縦に口の中に差し込ませたりするなどの指導の方法や説明の仕方ともほぼ共通していた。これは、小学生の歌っている様子を観察し、その場での判断にもとづいて指導の方法を選択したというよりも、中学校の授業の中で自分たちが教わった通りの練習や言語化の方法をそのまま模倣し、小学生の指導に適用したためと考えられる。

## 3.3 個々の小学生へのアドバイス記述

個々の小学生が記述した「こんなふうに歌えるようになりたい」「まだ、ここがうまくできません」(図1)に対する中学生のアドバイスの記述内容を分析した。

## ～マイミュージックタイム～

5年(1)組 名前( )

### 1 教えてくれる中学生の名前

\_\_\_\_\_

### 2 こんな風に歌えるようになりたい。

- ・ひびきわたるように歌いたい。
- ・ハイトも歌えて、ソプラノにつづれないようにしたい。

### 3 まだ、ここがうまくできません。

- ・アルトを歌う時にソプラノにつづれず。節 節
- ・息が長、続きます。節

### 4 教えてもらって、こんなことができるようになりました。

高い声が大さく出せるようになった！  
息も長くなりました。



### 5 中学生(名前)からのアドバイス

口を大きく開くことが大切で、時々壁に立って歌う練習をしてみてください。  
しっかり音程も取れていたし、高いところも上手に歌えてました。姿勢をよくすることによって、声の出し方もよくなると思うから、「姿勢をよくして歌う」ことを意識して歌ってみてください。

図1

### 3.3.1 身体のコントロールについて

中学生からのアドバイスの大部分は歌う姿勢や口の開け方など身体のコントロールに向けられていた。最も多かったのが「歌うときの姿勢」についての記述である。これは単独で記述されるか、または「声量を大きく」や「きれいな声」「高い声低い声」と組み合わせられて記述されていることが多かった。事例を示す。

- きれいな声を出すには、口のあけ方だけでなく、姿勢も大切です。常に4点セット(壁のやつ)を意識して、時々壁に立って歌う練習をしてみてください。
- しっかり音程も取れていたし、高いところも上手に歌えてました。姿勢をよくすることによって、声の出し方もよくなると思うから、「姿勢をよくして歌う」ことを意識して歌ってみてください。
- 姿勢をよくするには、頭とおしり、かかと、けんこうこつがまっすぐになることが大事です。だから壁に身体をつけて姿勢の練習をしてみてください。

2番目に多かったのは「口を大きくあける」である。「歌うときの姿勢」と同じく、「声量を大きく」「きれいな声」と組み合わせられて記述されることが多かった。

- 大きな声を出すには、口を指3つ分あけておなかから声を出すとすごく出しやすくなると思うのでぜひがんばってください。
- 低い声を出すときは、口を大きくあけて、少しぐらいは失敗したっていいから、自信を持って、練習していくと、どんどん声が出るようになると思います。
- 声はとてきれいでした。もう少し口を開けたら、きれいな声のまま大きな声が出るようになるので、たまに指を3本入れて、口の大きさをチェックしながらがんばってください。

3番目に多かったのは「目線を上に」である。これは単独で記述されることが多く、なぜそれが必要かについて記述されることは少なかった。

- 歌うときに大切なのは、かかと、おしり、頭を壁につけて、ななめ上を向いて歌う。
- これからは歌うときの視線をもっと高くして歌ってみてください。
- おなかに力を入れて、目線をあげてみてください。きっときれいで美しい声が出ると思います。

### 3.3.2 声量や声の音質

声量や声の音質についてのアドバイスは、その大部分が前述の身体のコントロールと組み合わせられている。声量を大きくすることについての事例を示す。

- 少しぐらいは失敗したっていいから、自信を持って、練習していくと、どんどん声が出るようになると思います。
- ○君はとってもキレイな声が出ていてびっくりしました。そのきれいな声がみんなに聞こえるような大きな声になるといいと思います。
- はじめは声が聞こえにくかったけど、おわりのほうではきれいな声が聞こえてきました。上手でした。だから恥ずかしながら大きな声を出してみてください。もっときれいな声が出ると思います。

小学生の側からの「こんなふうには歌えるようになりたい」「まだ、ここがうまくできません」の記述の中で多かったのが「高い声や低い声の出し方」について問うものであった。これに対する中学生のアドバイスも、その多くが「身体のコントロール」と組み合わせられて記述されている。

- 高い声を出すときには、手を使って音程を表したり、目をあけてまゆ毛を上げると出やすいですよ。
- 低い声を出すときは、口を大きくあけて。
- 高い声で歌うには、おなかから声を出して、高い音に気をつけて出してみるといいと思います。常に口を大きくあけてがんばってみてください。
- 手を横にして、ちゃんとした姿勢で歌ったら、低い声も出せるはず。

同様に「きれいな声」についてのアドバイス記述も「口を大きくあける」や「歌うときの姿勢」と組み合わせた記述が目立つ。

- キレイな声を出すためには、この前やった4点セット（カベのやつ）と、口を大きくあけることが大切です。“口を大きく”と書きましたが、これは“横に”開くのではなく“縦に”くちびるを突き出すような形で歌うとしっかりとした“歌声”ができると思います。
- 姿勢や表情を意識すれば、さらにもっとキレイな声で歌えるよ。がんばってね。

### 3.3.3 その他のアドバイス

「身体のコントロール」と「声量や声の音質」以外の内容では、「正確な音程」と「歌う態度」について、特に「恥ずかしがらずに」「自信を持って歌う」ようにアドバイスする記述が見られた。

- 1回目で、少しつられちゃってたから、まわりの音とかをよく聞いて、自分の持っている声をきれいにさせるように頑張ってください。
- 音程を取るのとはすごく難しいけど、その歌の音程を覚えながら、しっかりと聞いて、それを全部覚えるくらいにがんばろう。そして、つぎはその音と同じ音を出すように考えながら歌ってみよう。
- 上の方を見ること、口を大きくあけて歌うことはバッチリです。歌うときに大きな声を出して歌うのが恥ずかしいのはみんな一緒です。思いきって大きな声を出してみてもいいよ。みんなも声を出してくれて恥ずかしくなくなるよ。
- ○君は、最初は口があまりあいてませんでしたけど、練習するうちに元気に歌えていたと思います。口を大きくあけることを忘れないで、楽しく歌えば、きっとやる気も出てくると思います。

中学生による小学生へのアドバイスの内容からは、中学生の全体的な指導方針が、「適切な身体のコントロールによって大きな声やきれいな声をつくること」に限定されていることが読み取れる。

### 3.4 小学生指導の感想・反省記述

合同学習終了後、小学生の指導に当たった中学生に、「指導に対する小学生の反応についての印象」「上手くいったところ、難しかったところ」「次回の合同学習での自分の課題」について記述させた（図2）。

小学生の反応についての印象のなかで非常に多かったのは「素直」であった。実例を上げる。

- 指導したことを全部素直に聞いてくれたのでよかった。歌うときの姿勢を教えるのが少し難しかったが、最後にはとてもキレイになった。あまり教え方が上手というわけではないが、小学生が一生懸命理解しようとしてくれてよかった。
- みんなよく自分の話を聞いてくれてよかった。指導をしたところをすなおに受けとめてくれてよかった。
- 誰もふざけないで、ちゃんと真面目にうなづきながらきいてくれたことがうれしかった。
- 正直騒いだり言うことをきいてくれなかったりするかと思っていただけ、予想と違ってものすごく素直で、全て言うことを聞いてくれた。
- 教えてあげたことに対して、素直に「はい」とか「わかりました」とか反応してくれてすごくうれしかったです。また、教えたことをすぐやってくれて早く上達しそうだなあと思いました。

## 合同授業を振り返って

3年( ) 級( ) 番 名前( )

**1 指導に対する小学生の反応についての印象**

みんな素直に聞いてくれて、教えたことをすぐに実行してくれました。

**2 上手くいったところ、難しかったところ**

○上手くいったところ  
・姿勢について、壁を使って教えることができた  
・口の開け方で、実際に指さる庄入ることで、説明することができた。  
○反省したところ  
・表情づくりで、上手く説明できなかった。

**3 次回の合同授業での自分の課題**

もっと、小学生に分かりやすい説明をして、実際に目の前でしてあげること。

図2

これらの記述からは、まずこの合同学習にのぞむにあたって中学生が感じていた「教える立場」に立つことの不安が読み取れる。それだけに小学生が自分たちの指導に真剣に耳を傾け、その指導に応えようと一生懸命になっていた姿が強く印象に残ったようだ。

次に、中学生が「上手くいった」と記述しているのは、歌うときの姿勢に関する指導についてであった。

- 後頭部、肩甲骨、おしり、かかとの4点セット（歌の姿勢）を身につけさせることはできた。
- 姿勢や口の大きさを鏡を使って教え、また、腹式呼吸にも徐々に慣れていったことで、小学生の歌うときの表情や声量がよくなっていったこと。
- 姿勢を、壁を使って教えるのが上手くいったと思います。

逆に「難しかった」と記述しているのは「言葉で説明する」ことであった。

- 言葉で正確に説明し理解をさせるのに少してこずりました。
- 自分が分かっていることを伝えるのが難しかった。
- 「難しかったところ」は、すぐに理解してくれるけど、そのために、小学生が分かるような言葉を考えて教えたことです。中学校と同じように言うと、小学生はなかなか難しいようで、わからないので、小学生にわかるように内容を変えながら話すことが大変でした。
- やっぱりわかりやすく教えるために言葉を選んで教えるのが大変だった。

指導の感想・課題の記述からは、前述したように中学生の指導方針が「適切な身体のコントロールによって大きな声やきれいな声をつくること」であり自分たちの指導によって小学生が上達していることを手ごたえとして感じていることが伺える。

また「言葉で説明すること」の難しさも、この身体のコントロールを正確に伝達することに関係している。音楽に限らずパフォーマンス時の身体コントロールの感覚を、他者にわかりやすくするため言語化することは、確かに非常に難しい。しかしながら、このことは実際に教える立場に立ち、自分の言葉とそれに対する相手の反応を注意深く観察しなければ理解できないことでもある。小学生に対して効果的にわかりやすく教えることについての豊かな思考が中学生の中で展開されていたと言える。

今回の合同学習での自分の課題で一番多かったのは「わかりやすい説明」と「手本を見せる」であった。

- 説明の仕方をわかりやすくする。小学生の立場に立って、出来るだけわかりやすいようにアドバイスできるようがんばる。
- 同じところばかり教えるのではなく、幅広く教える。教えてもできない子には1対1で教えて、最低でも『基本』をできるようにする。そして、笑顔で優しく、わかりやすく教える。
- 自分がお手本になり、わかりやすく教えられるようにすることなどを課題としていきたいです。
- 自分も一生懸命に歌いたいと思います。自分自身がお手本になれるように、授業でも真剣に練習して、今回の合同練習でもしっかり教えられるようにしたいです。

これらの記述からも、中学生が効果的にわかりやすく教えることについての高度な思考を展開していることが分かる。ここには「1人ひとりの子どもに対応すること」「言葉で説明するよりもやって見せること」など、大学生の教育実習でも通用する教育技術についての本質的な洞察がある。

教える技術についての思考が豊かに展開されている半面、小学生の演奏表現をさらに高めていくためには何が必要なのかなど、音楽そのものについて反省的思考はほとんど見られなかった。

## 4` 考察

中学生の発言や記述の分析を通して明らかになったことは次の2点である。

- (1) 中学生の全体的な指導方針は、「適切な身体のコントロールによって大きな声やきれいな声をつくること」に限定されており、その指導や言語化の方法は自分たちが中学校の授業の中で受けた指導の模倣である。
- (2) 効果的にわかりやすく教えるための教育技術について豊かな反省的思考を展開している半面、音楽そのものについての反省的思考は不十分である。

中学生と小学生のほとんどが初対面であり、お互い十分なコミュニケーションが取れていないこと、中学生に対して「音程や声の出し方のうまくいっていない部分を小学生にアドバイスする」としか合同学習のねらいを伝えていなかったことから、中学生の指導方針が基礎的な発声スキルに限定されていったことは自然な流れだったといえる。さらに個々の小学生が抱える技能上の問題を的確に診断し、適切な指導方法を選択することを中学生に要求することは非常に困難であることから考えて、指導や言語化の方法が自分たちの受けた指導の模倣になってしまったことも、またやむを得ない。

しかしながら中学生の立場から今回の合同学習を振り返るとき、少なくとも何についてどのように教えるかに関して独自の判断と発想に基づいて問題を解決する機会は与えられていないまま終わっているとみることができる。

もちろん、だからといって中学生にとってこの合同学習が無意味だったわけではない。初めて「指導する立場」として初対面の小学生の前に立つ不安の中で、中学生1人ひとりが自分の担当した小学生の上達を願いながら試行錯誤した姿が、発言や記述の中から読み取れた。自分たちの施した指導によって小学生の歌声がよい方向へ変化したり、伝えたいことがなかなかうまく表現できず戸惑ったりする経験を通して、「言葉の選び方」や「わかりやすい説明」など効果的な教育技術についての豊かな思考を展開していたことは明らかである。

反面、それはやはり管田(2008)の言う『『お世話する—お世話される』関係への固定化』であるといえる。他者に何かを教える技術は確かに1つの重要な社会的スキルであり、中学生の今後の様々な学習場面の中で今回の指導経験が生かされていくに違いない。しかし「お世話する—お世話される」関係のままでは「思考に富み感情豊かな音楽経験が、相互作用的な音楽行動を通じて具体化される、外的相互作用」(テイト&ハック 1991, 72頁)としての音楽的共有にはつながらない。

中学生・小学生双方にとって合同学習が意義深い音楽経験の場となるためには、一方的に教える立場に中学生を立たせるのではなく、逆に小学生の発想に触発されることによって中学生が自分たちだけではなしえなかったアイデアを創造するような創発(藤岡 1998; 嶺井・木村 1998; 江森 2007)の関係を両者の間に構築する必要がある。

嶺井・木村(1998)は、創発性をねらう教材について「結果や答えが収束してしまうような問題ではなく、いくつもの答えがあり、なおかつ事象が複数混在した状態にある問題」であり「生徒の独自の視点の持ち方により教師が意図しなかった新たな発見が期待できる」(30頁)ものであると述べている。この視点から見ると「適切な身体のコントロールによって大きな声やきれいな声をつくる」ことに創発性を期待することは難しい。なぜなら、前述したように、こうした基礎的な身体技能についての的確な診断と適切な改善方法の選択を子どもたちに委ねる

ことは困難であり、この問題が学習の中心となる限り、中学生と小学生には、教師の模倣による指導とその指導の無条件の受け入れ以外に選択の余地が見出せないからである。

合同学習を、創発的な音楽学習の場とするためには、中学生による小学生の単なる技能指導から中学生と小学生共同の創造的な表現活動へと、その目的を転換していく必要がある。仮屋園(2003)は、複式学級における異年齢集団での協同問題解決場面の観察から、話し合い展開の主導権は当初上学年によってにぎられているものの、回を重ねるごとに下学年も話し合いの展開に参入していくことを明らかにしている。小学生の側から音楽表現の方向性や方法についての素朴な意見が中学生に対して投げかけられるような学習場面を設定し、中学生だけでは、あるいは小学生だけでは考えつかなかった音楽的アイデアに到達させることができれば、はじめて中学生・小学生双方にとって意義深い音楽学習の場になる。そのためには例えば、同じ楽曲についてグループごとに表現解釈を検討させ、お互いに演奏発表や批評をする活動や、あるいは創造的音楽学習の手法を取り入れ、グループごとのテーマに基づき打楽器などを使って短い即興演奏を行うなどの活動が考えられるだろう。

## 5 おわりに

5月の1回目の合同学習の後、時間をおいて7月7日に2回目の合同学習を行った。このときは、小学生3人に対し中学生3名という、人数的にはより望ましい合同学習を計画した。

2回目ということと、グループの人数が適切であること、具体的な学びの箇所を設定したことなどもあって、1回目と比べると、中学生による、よりの確かな問題箇所の把握とそれに対するより具体的な指導場面が見られた。例えば、小節を越えて音を伸ばす箇所では、その音の保持の徹底をはかるためのカウントを1人の中学生が鍵盤楽器で行い、もう1人が小学生と一緒に歌って支援するなど、中学生の分担による効果的な指導上の工夫が見られた。また、リズムの難しい箇所では、「歌わないでまずよく聴いて」と指示してから範唱してみせるなどの配慮もなされていた。1回目の合同学習に比べ、全体的に中学生の指導にかなりの自信を垣間見ることができた。

しかし、比較的うまく学びができていないグループと、そうでないグループがあり、グループの分け方が少なくとも学びに影響しているのではないかと思わせる場面が見られた。とくに中学生の男子と小学生の女子とのグループでは、最初の段階でコミュニケーションがうまくいかず、中学生と小学生の目がなかなか合わない場面があった。その点、中学生の女子と小学生の男子の組み合わせの場合には、中学生のてきばきとした指導に小学生が必死について行くという頼もしい場面が見られた。年下の子どもとのコミュニケーション能力については、一般的に女子の方が優れており、このため男子よりも「お世話する」役割に適応しやすいのかもしれない。

合同学習の内容自体を変えることも一方で考えられるが、合同学習自体を効果的に行うためには、グループ分けに際して指導教員が事前に子どもの音楽的素養やコミュニケーション力など入念にチェックしておく必要がある、どのような組み合わせでグループを構成するかの研究も必要となろう。

また今回は分析しなかったが、中学生と小学生間にとまどいの場面が生じている場合に、指導教員としてどのような支援を行ったか、どのような支援が必要であったかなどを研究するこ

とも、合同学習の今後の課題として残った。

### 引用文献

- マルコム・テイト, ポール・ハック (1991)『音楽教育の原理と方法』(千成俊夫, 竹内俊一, 山田潤次 訳) 音楽之友社.
- 江森英世(2007)「無作為の創造 : 数学学習におけるコミュニケーションの創発連鎖」『日本数学教育学会誌』89(6), 12-23.
- 仮屋園昭彦(2003)「特認校複式学級に属する児童の異年齢集団による継続的話し合い活動の分析 : 協同問題解決型課題を用いて」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』13, 157-168.
- 管田貴子(2008)「異年齢保育の教育的意義と保育者の援助に関する研究」『弘前大学教育学部紀要』(100), 69-73.
- 菅裕・藤本いく代・阪本幹子・竹井成美・稲野さやか・石川優子・栗野聖子・山下さちか(2009)「音楽科における異年齢集団学習の試み (1)」『宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要』17, 47-52.
- 藤岡完治 (1998)「授業をデザインする」『成長する教師 教師学への誘い』(浅田匡, 生田孝至, 藤岡完治編著) 金子書房, 8-23頁.
- 嶺井秀夫・木村捨雄(1998)「中学校理科教育における子どもの創造性の特質と授業改善に関する研究」『日本科学教育学会研究会研究報告』12(3), 25-30.